就職活動体験記

経済学部（2022 年卒業予定）

私が就活をスタートしたのは 3 回生の春からでした。最初は何をしたらいいかわからず、とりあえず自己分析から始めました。しばらくしてインターンのエントリーが始まりましたが ES はひとつも通らず夏のインターンはあきらめました。自分にがっかりするのが怖くてエントリーすることをやめたので、結局、就活を通して一度もインターンに参加することはありませんでした。これまでそれなりに頑張れば大概のことはうまくいっていた人生において、こんなにうまくいかなかったことは初めてで戸惑いました。

就活を終えた今でも思うのですが、就活を始めるってどういう状態のことをいうのでしょうか。3 年の春からずっと就活してきたつもりなのに、3 年生の最後の 3 月の解禁のときには、エントリーしたいと思える企業がひとつもありませんでした。確かに努力してきたはずなのに、なにも手に持っていないことの恐怖。自分が出遅れている気しかしなくて、不安で怖くて、もう全部手遅れじゃないかと思って泣いた日がありました。六甲台就職相談センターに相談し始めたのもそのときからです。自分ひとりではどうしようもなかったから、どうしたらいいのかを誰かに教えてほしかった。そこで出会ったのが浅田さんです。私の就活を語る上で欠かせない人です。なにもかもうまくいかなくて自分に自信をなくしてしまったときに「あなたは企業が求めているものを持っているから大丈夫」という言葉をかけて下さり、張り詰めていた気持ちが緩み、肩の力が抜けたのを覚えています。常に私が前を向くきっかけになりました。

企業選びで困ったのは、自分がどういう人間かはわかるけど、なにをしたいかがずっとわからなかったことです。そのときに持っていた仕事観といえば「仕事に追われて余裕のない人生は嫌だ」「尊敬できる人がたくさんいるところで働きたい」ぐらいで、人に寄り添える仕事であればなんでもいいと思っていました。だから、無数にある企業から働きたい企業を絞り込むことが一向にできず、とりあえず興味をもてた業界の企業に片っ端からエントリーすることにしました。しかしそんな漠然とした考えでまともに ES がかけるはずもなく、結果はほぼ惨敗。そのとき、焦って参加した神大の説明会で繊維商社という業界を知りました。もともと洋服が好きだったので、大好きな洋服に関われる仕事に魅力を感じて、繊維商社を含めアパレル業界を第一志望とすることに決めました。ただ好きなことを仕事にすることに不安もあり、仕事も社会もそんなに甘くないことはわかっていたので、自分が楽な方に逃げているだけじゃないかと思うこともありました。だけど、洋服のどこに魅力を感じて、企業のどこに共感しているのかを考え続けて、自分の信念と洋服の本質が結びついたときは、以前よりも何倍も自信をもって就活ができるようになりました。しかしそれでうまくいったわけではなく、繊維商社はことごとく落ちたし、最終的に ES が通ったのはアパレルメーカーの 2 社だけでした。気持ちは前に進んでいるはずなのに、結果がでなくて足踏みしている気持ちになりました。内定をもらえるイメージがいつになってもわかなくて、

無慈悲な「お祈りメール」にどん底に突き落とされるような気分になって、ずっと危ない橋を渡っている感覚でした。「就活はマッチングだから」と励ましてもらったけど、ある意味、その言葉が一番苦しかったように思います。自分の努力ではどうにもならないところで落とされるなら、私を認めてくれる会社はどこなのか教えてほしかった。自分らしくいたいのに、だれにも認めてもらえない自分らしさなんて必要あるのかと思うこともありました。結局、採用人数が少ないアパレルだけでは不安だからと、食品会社や浅田さんに勧められた百貨店数社もあわせて何十社とESをだしましたが、面接まで進んだのは8社くらいです。その中で第一志望群と考えたのはアパレルの2社と百貨店の3社でした。

ESや企業選びでは散々躓きましたが、面接は比較的うまくいき、第一志望群の3社は全て最終面接まで進むことができました。特に緊張もせずに 100%の力で面接をできたのは自己分析に時間をかけたからだと思います。インターンを諦めた代わりに、ご縁があって出会った企業の人事の方と面談を繰り返し、自分がどういう人間なのかを徹底的に掘り下げました。その結果、どんな質問にも自分らしく一貫して答えることができ、これでだめなら合わなかったということだと納得する所までもっていくことができました。自分の根源や本質はなんなのか、それが志望企業のどの部分と繋がっているのかを明確にできたのが大きかったのだと思います。

ただ、それでも、私はずっとESを書きながら、面接を受けながら、この人たちに私のなにがわかるのだろうと思っていました。21年間、傷つきながら必死に築き上げてきたものを、こんな短時間で評価されたくなかった。だけど、きっとわからなくても、わかろうとしてくれる会社はあるのだと思います。質問の内容だったり、選考結果の報告の仕方だったり、そう思える瞬間がありました。私の場合はそういう企業が選考を進んでいくにつれ、働きたい会社へと変わっていきました。だから最終的に就職先を百貨店に決めました。もともと百貨店には興味がなく、正直、手持ちを増やすためだけの目的でした。一次面接も準備はしましたが、落ちてもいいやという軽い気持ちで受けていたし、志望度を聞かれたときも第二志望群ですと馬鹿正直に答えてしまって笑われたりもしました。しかし、面接が進み、企業研究を深めていく内に、自分のやりたいことができる環境であることがわかってきました。そしてなによりも人事や社員の方の人柄に惹かれて、いつのまにか第一志望になり、就職先になりました。

様々な面接の過程で気づいたことは、自分は「感性や個性を大切にしてくれる会社」で働きたいのだということでした。裁量権なんてたいしたことではなく、たとえ実現できなくても、私の意見に耳を傾けてくれて、私であることを大事にしてくれる会社で働きたかった。相槌をうちながら真剣に目をみて話を聞いて下さったこと、ありのままを出せるような環境を常に用意してくださったこと、そういう要素から自分が理想としている企業だと気づきました。たとえ、今は何がしたいのか、どんな場所で働きたいのかがわからなくても、選考を通してわかってくることがあります。漠然と「良い」と思った理由は何なのか、どの部分が気に入らなかったのか、そういう感性を大切に紐解いて、自分のなかに落とし込み続けました。選考だけでなく、日常の中で何気なく読んだ本、観たテレビ、友達との会話等々、様々な行動の中にきっかけは潜んでおり、それを逃さずにしっかりと向き合うことが自分を知ることに繋がりました。

どれだけ多くの人に相談に乗ってもらっても、就活は孤独なものです。私を理解できるのは私だけであり、また、企業は私自身でしか判断しないからです。嘘をついても、正直に話しても、自分が納得できるのなら何でもいいと思います。その先の人生を歩むのは私でしかないから、私は未来で恥じることのないような選択をしたいと思いました。だから、自分にも企業にも誠実であり、決して企業に寄せたり妥協したりしないことを大切にしていました。そういう意味では、最大の味方は過去の自分だったような気がします。誰にも嫌われたくなくて相手の顔色を過度にうかがっていたこと。集団の中で浮かないように常にビクビクしていたこと。そんな自分が嫌いだったのに、今ではそのおかげで客観性をもてるようになり、常に俯瞰して物事を考えられるようになりました。あのとき苦しんだ過去の全てが自分の味方になってくれたような気がします。私にとっての就活はこれまで生きてきた 21 年の集大成でした。面接では、就活生としての半年ではなく、これまでの人生を懸けて得てきたものを評価されているような気がしていました。ガクチカも、自己アピールもほんの一要素でしかなくて、話し方とか雰囲気とか考え方とか、全体を通してどんな人間であるかを見られていたのだと思います。就活中は苦しくて仕方なかったですが、就活を終えた今は心から良い経験ができたと思っています。社会にでていく前に、自分がどんな風に仕事に取り組み、どんな人生を歩んでいきたいかという目標を明確に持つことができたからです。しかし、今は納得していても、いざ働いてみたときに、こんなはずじゃなかったと思う瞬間はどこかで必ずあると思います。そんな時にこそ、就活を頑張った経験が大きな力になり、自分で自分の選択を正解にしていく努力ができるのだと思います。これから就職活動を始めようとしている皆さんには、過去の自分のためにも、未来の自分のためにも、今の自分が認められるような就活ができるよう、精一杯頑張ってほしいと思います。心から応援しています。